広　　場

田畑の草種（くさぐさ）

薮蔓小豆（ヤブツルアズキ）

（公財）日本植物調節剤研究協会
兵庫試験地　須藤　健一

マメ科ササゲ属のつる性の一年草。河原，土手，畦畔，畑など比較的明るい草地に生える。かつては本州以南とされていたが今では全国に分布する。茎は長さ3m以上になり蔓になって他に絡みつく。全草に黄褐色の粗い長毛が生え，葉は互生し，長い葉柄のある3出複葉。花期は8~10月。葉腋から短い花序柄を出し，2~10個の花を持つ総状花序をつける。花色は黄色で15~18mm。普通，マメ科植物の花は蝶形花で，奥にある旗弁，その前の翼弁，その下の竜骨弁からなり左右相称であるが，ヤブツルアズキはすべて左右非相称。竜骨弁は2枚が合着し1/2から3/4回転し，左の翼弁は竜骨弁を抱き，右の翼弁は飛び出た竜骨弁の距にかぶさる。果実は線形の豆果で，小豆より小さい暗紫褐色の種子を6~14個ほど入れる。

このヤブツルアズキは小豆の原種とされ，縄文時代初期の遺跡からツルマメなどと一緒に土器表面の子実の痕跡や炭化種子などがみつかっている。およそ一万年続いたという縄文時代であるが，その比較的早い時期から利用されていたことが伺える。

例えば縄文中期の青森の三内丸山遺跡には200人ほどが暮らしていたとされる。一方，当時の縄文人の平均寿命は15歳とも30歳ともいわれ，現代から想像すると若者ばかりの集落である。しかし，その短い寿命の間にも，「子どもが生まれた」とか「栽培していた芋が収穫できた」とか，さらに巡り巡ってくる季節の節々に，長生きしている数人の壮老年者を中心に，若者たちがこぞって集落の中央にある広場に集まってお祭りとして楽しんでいたのではないだろうか。その時に必要になるのが非日常としての「ハレ」を演出するための「赤」であり，その「赤」を作り出していたのがヤブツルアズキであった。

縄文時代後期になると稲作の伝播とともにアズキももたらされ栽培化が進んでいった。このころから弥生時代にかけての遺跡からアズキの痕跡とともにヤブツルアズキの痕跡も見つかっている。どちらも栽培されていたと思われるが，アズキは食用に，ヤブツルアズキは祭祀用に使われていたのであろう。アズキに比べると子実色は黒に近いような褐色であるが，炊き上げた時には豆も煮汁もみごとに「赤」に変化する。その変化も祭祀用として意味があったのかもしれない。

協会だより

試験成績検討会

●2023年度畑作・草地飼料作関係除草剤・生育調節剤試験成績検討会（Web会議）
日時：2023年12月 6日 （水）10:00～17:00
　　　　　　　　　7日 （木）10:00～17:00

●2023年度水稲関係除草剤直播栽培・畦畔等 適用性試験成績検討会（Web会議）
日時：2023年12月12日 （火） 9:30～17:00
　　　　　　　　13日 （水） 9:30～17:00

●2023年度水稲関係除草剤試験成績中央判定会議（Web会議）
日時：2023年12月15日 （金） 9:30～17:00

●2023年度春夏作野菜花き関係除草剤・生育調節剤試験成績検討会（Web会議）
日時：2023年12月19日 （火）10:00～17:00
　　　　　　　　20日 （水）10:00～12:00

●2023年度水稲関係生育調節剤試験成績検討会（Web会議）
日時：2023年12月21日 （木）10:00～17:00

植調第 57 巻　第 7 号

■ 発　行　2023 年 10 月 23 日
■ 編集・発行　公益財団法人日本植物調節剤研究協会
東京都台東区台東 1 丁目 26 番 6 号
TEL 03-3832-4188　FAX 03-3833-1807
■ 発行人　大谷　敏郎
■ 印　刷　㈲ネットワン

© Japan Association for Advancement of Phyto-Regulators (JAPR) 2016
掲載記事・論文の無断転載および複写を禁止します。転載を希望される場合は当協会宛にお知らせ願います。

取　扱　株式会社全国農村教育協会
〒110-0016　東京都台東区台東1-26-6 (植調会館)
TEL 03-3833-1821